

筑西の歴史を訪ねて

特集

国・県指定文化財を中心に

3月28日、下館市と関城町、明野町、協和町が合併して誕生した『筑西市』。合併前の旧4市町は、それまでに育んできた歴史や文化を、それぞれに持っていました。市民として一体感を持ちお互いの理解を深めるためにも、筑西の先人たちが残してきた歴史を知るのは大切なことです。そこで今回は、市内に残る歴史の足跡を、国・県指定文化財を中心に、市民記者とともに訪ねてみました。

観音寺と伊達氏

旧下館市の中館にある観音寺。本尊の木造観世音菩薩立像(国指定重要文化財・彫刻)は、鎌倉時代の作です。ここには、鎌倉幕府の御家人であった伊佐氏の館・伊佐城があったとされており、伊佐城跡として県の史跡に指定されています。

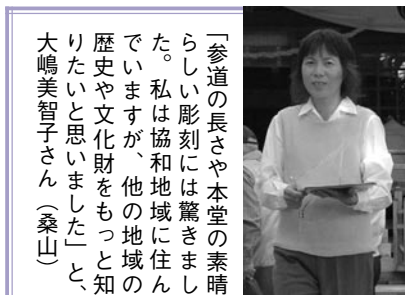
伊佐氏は、源頼朝による文治5年(1189)の奥州征伐(奥州藤原氏との戦い)に参加し、軍功を立て伊達地方(福島県)を与えられています。伊達地方に移り住んだ伊佐氏の子孫が代々『伊達』を名乗り、この系統が後の仙台藩65万石の伊達氏となりました。一方の伊佐城は、南北朝の争乱の際、南朝方として関城(関館)や大宝城(下妻市)とともに高師冬軍などと戦いましたが、康永2年(興国4年・1343)に落城。以後廃城になったといわれています。時代は下って元文元年(1736)、仙台藩主の伊達吉村は、江戸から仙台への帰途に祖先ゆかりの地である観音寺へ詣で、螺鈿硯箱(県指定文化財・工芸品)や絹本着色八景の図(県指定文化財・絵画)などを寄進しています。



▲木造観世音菩薩立像



▲伊佐城跡に建つ石碑



「参道の長さや本堂の素晴らしい彫刻には驚きました。私は協和地域に住んでいます。他の地域の歴史や文化財をもっと知りたいと思います」と、大嶋美智子さん(桑山)

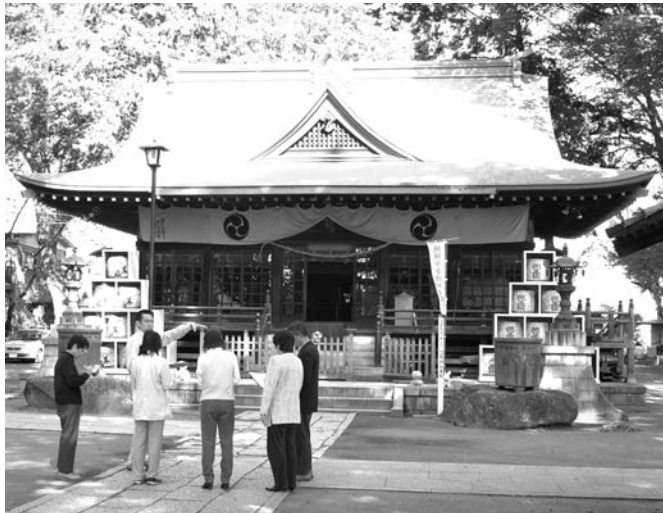


▲螺鈿硯箱



▲絹本着色八景の図

羽黒神社



▲羽黒神社の境内



▲木造狛犬



▲絵馬



▲羽黒神社本殿



▲木造愛宕明神立像

筑西の歴史を訪ねて

特集
国・県指定文化財を中心に

旧下館市の大町にある羽黒神社。文明10年(1478)、結城氏の客分であった水谷勝氏が初代城主として下館城に居を構え、文明13年(1481)に領内安堵のため出羽国(山形県)の羽黒大神を勧請、羽黒神社を建立したといわれています。

第6代水谷政村(蟠龍斎)の活躍などで下克上の戦国時代を生き抜いた水谷氏は、その後、

「筑西の歴史に触れることができて有意義な1日になりました。私たちの貴重な文化財を、これからも大切に守っていききたいですね」と、廣瀬住子さん(玉戸)



第8代勝隆が寛永16年(1639)に備中成羽へ、さらに寛永19年(1642)に備中松山(岡山県高梁市)へと領地替えとなり、下館を離れました。現在筑西市と高梁市は、水谷氏が結ぶ縁により友好都市提携を結んでいます。

また羽黒神社には、かつて西郷谷(現在の羽黒神社付近)の鎮守であった愛宕神社の御神体・木造愛宕明神立像(県指定文化財・彫刻)や、鎌倉時代に作られた木造狛犬(県指定文化財・彫刻)、水谷家の家老・鶴

見内蔵助忠俊が奉納した縦98cm、横130cmの絵馬(県指定文化財・絵画)などが保存されているほか、県指定文化財の本殿など貴重な建造物が残されています。

また、昭和38年に檀家から寄附された、鎌倉時代の作といわれる板碑(石材を板状に加工し、縁者の追善供養などに用いた石製の塔婆)が、工芸品として県の文化財に指定されています。

定林寺

旧下館市の岡芹にある定林寺は、初代下館城主の水谷勝氏が菩提寺とし、第8代勝隆が現在の地に移したといわれる、水谷氏ゆかりの寺。永禄10年(1567)に第7代水谷勝俊が寄進し、『常州伊佐郡奥崎郷下館村』『大檀那 水谷兵部大輔藤原勝俊』などと銘が刻まれた銅鐘(県指定文化財・工芸品)や、勝氏から勝隆に至る水谷家歴代の墓(市指定文化財・史跡)などが残されています。



▲銅鐘



▲板碑(青石塔婆)



▲水谷家歴代の墓の前で



◀高松家に保存されている伝記版木に見入る市民記者

▼版木に彫られた『清明傳記』の鏡文字



安倍清明生誕の地

旧明野町猫島は、平安時代の陰陽師・安倍晴明出身の地として言い伝えられています。その由来は、江戸時代初期のものとされる『篋篋抄』（晴明作に仮託して成立した陰陽書『篋篋内伝』の解説本）の冒頭にみられ、そこには、晴明は常陸国猫島の生まれであると記されています。

旧明野町猫島の高松家には、江戸時代のものと思われる安倍晴明伝記版木、八幡稲荷権化帳伝記版木（市指定文化財・歴史資料）が伝えられていますが、また、高松家の敷地

安倍清明物語

江戸時代の仮名草子『安倍清明物語』は、『篋篋抄』を参照しつつ、様々な逸話を組み合わせて成立しています。その一部を紹介しましょう。

——播磨国の道満法師が晴明の評判を聞きつけ、晴明と術比べをしようと都に上りました。2人は宮中で、大柑子15個の入った櫃の中身を占うことに。道満が先に言い当てますが、晴明は術により大柑子をねずみ15匹に入れ替えてしまいます。ふたを開くとねずみがかけ出し、大柑子は一つもありません。勝負に負けた道満は晴明の弟子になったのです。

内には、安倍晴明が祀られた神社や、どんな干ばつでも決して枯れないと言われている晴明の井戸があり、晴明伝説の足跡を示しています。

式神（鬼神）を使い、天文学を用いて物事を予見したとされる安倍晴明。史実としての晴明は、延喜21年（921）生まれ。賀茂忠行・保憲父子に陰陽道を学び、天文博士などとして6代の天皇に仕えています。晴明は寛弘2年（1005）、85歳で没したとされ、今年で没後1000年にあたります。

晴明の没後、様々な逸話が作られました。『篋篋抄』によれば、晴明は、ある男と狐が化けた遊女から生まれたとされます。平安時代後期の歴史物語『大鏡』

や鎌倉時代に成立した説話集『宇治拾遺物語』には不思議な力を持つ晴明の姿が描かれ、江戸時代には浄瑠璃、歌舞伎などで演じられています。そして晴明は今なお、偉大な陰陽師として人びとに語り継がれています。



「市内にはこんななたくさんの文化財があるんだということを知り、感心しました。筑西市の広さを感じますね」と深見恭子さん（村田）

石造五輪塔

旧明野町村田の共同墓地の中央高台には、高さ2.16mの石造五輪塔（県指定文化財・工芸品）があります。五輪塔とは、万物は空・風・火・水・地の五大要素から成り立っているという世界観を表したものです。この五

▼石造五輪塔



輪塔は、空輪は宝珠形、風輪は三分の1円形、火輪は急傾斜で、鎌倉時代の典型的な作品です。

建造から700年もの歳月を経ているため、刻まれた文字を読み取ることは不可能ですが、村田荘初代の地頭、村田朝政の慰霊のために建立されたものであると考えられています。



◀宮山ふるさとふれあい公園内の展示室では、安倍晴明の歴史を紹介しており、神秘的な晴明伝説の一端に触れることができます。

小栗判官物語

かつてこの地域に繁栄を築いた小栗氏。鎌倉大草紙に描かれた小栗判官物語を紹介しましょう。

——時は応永30年(1423)。常陸小栗の第十四代城主、判官小栗満重は、関東公方・足利持氏に攻められ、戦いに敗れてしまいます。満重の子、助重は城を捨て、10人の家臣とともに三河国(現在の愛知県)に逃れました。その途中、相模国藤沢宿で、盗賊・横山大膳に毒殺を企てられます。しかし、遊女照手姫の舞により、助重は命を救われたのでした。



▲小栗内外大神宮内宮・外宮
▲御遷殿

小栗内外大神宮

11世紀末、旧協和町を中心とした地域は、常陸国内唯一の伊勢神宮の領地小栗御厨(小栗保)として成立。常陸大掾の一族・重家が入部して小栗の姓を名乗り、小栗氏の祖となりました。

旧協和町小栗には、県指定文化財(建造物)である小栗内外大神宮があります。内宮・外宮の両本殿は、玉垣内に2棟が東西に並んでおり、内宮には天照大神、外宮には豊受大神と国常立尊を祀っています。本殿は応永年間の火災により焼失しましたが、延宝7年(1679)に再建されました。御遷殿は、室町時代末期に建てられたもので、扉金具に『元龜五年(天正2年

1574)甲戌二月吉日』の銘が刻まれています。

小栗内外大神宮太々神楽

小栗内外大神宮太々神楽(県指定無形民俗文化財)は、寛延4年(1751)、山城国愛宕郡三嶋神宮司らによって小栗山城守宣政に伝えられました。その後、伊勢神楽師の指導によって十二神楽三十六座という形が成立。十二の場面に三十六柱の神々が登場し、番外に八岐大蛇退治の無言劇があります。勇壮な舞と融和的な舞で構成され、五穀豊穡や無病息災を祈願する神楽で、春と秋の例祭で奉納されます。



新治廃寺跡

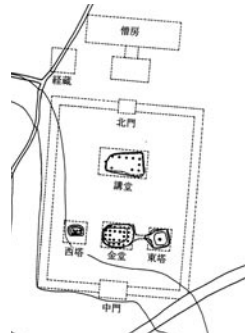


古代、東海道の終点であった常陸国。「古事記」には、日本武尊が東征の帰途に詠んだとされる

歌『新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる』が記されています。新治は、長い歴史を持つ地名です。

旧協和町の久地楽には、奈良時代に創建された常陸国新治郡の寺院跡があり、国の文化財(史跡)に指定されています。

4基の土壇跡のみが残っており、昭和14年からの発掘調査に



▲伽藍配置図



「新治廃寺跡では奈良時代の土台石や瓦片を見ることができ、歴史を感じましたね。大変参考になりました」と小島邦光さん(連沼)

よって、金堂の東西にそれぞれ塔を配置するという特異な伽藍配置が明らかになりました。また、廃寺跡からは、奈良時代前期の様式を持つ軒丸瓦や軒平瓦などが数多く出土しています。

新治郡衙跡

新治廃寺跡の南側には、奈良時代、郡の役所が置かれ、政治・経済・文化の中心として繁栄した新治郡衙跡(国指定文化財・史跡)があります。昭和16年に始まった発掘調査により、倉庫群と庁舎跡の計51棟におよぶ遺構が確認されました。この遺構からは、『日本後紀』の記事に符合した、13棟の建物群と多量の焼米(炭火米)が確認され、新治郡の郡衙跡であることが立証されています。



関城跡

旧関城町の関館には、国の史跡に指定されている関城跡が残っています。



正慶2年（元弘3年・1333）の鎌倉幕府滅亡後、政治の実権を武士から奪い返した後醍醐天皇は、建武の新政と呼ばれる天皇親政を開始しました。しかし、配下の足利尊氏が離反すると新政権は崩壊し、後醍醐天皇は吉野に逃れます。建武3年（延元元年・1336）、尊氏が室町幕府を開き、光明天皇を擁立。こうして朝廷が京（北朝）と吉野（南朝）に分裂し互いに争う、いわゆる南北朝時代が訪れました。

地方の勢力を結集して再興を計ろうと、北畠親房・顕房親子などが船団を組んで伊勢を出発しますが、奥羽到着前に暴風雨に遭遇してしまいます。常陸東条浦に流れ着いた親房は、南朝方の小田治久を頼って小田城（つくば市）に入城。この時、関城の城主・関宗祐が親房のもとに参じて、ともに北朝方と戦っています。その後、北朝方の高師冬に攻められた治久が降伏すると、親房は関城に入り、関宗祐や大宝城の下妻政泰、伊佐城などと力を合わせ戦い続けました。

康永2年（興国4年・1344

3）、長く北朝方の包囲に耐えてきた関城と下妻城、伊佐城も、遂に万策尽きて落城。関宗祐は、親房を脱出させ、城と運命をともしたと伝えられています。

現在、関城跡には、関宗祐のものといわれる墓や激戦を物語る坑道跡などが残され、当時のしのぶことができます。また地域の人の手により、落城の日（11月11日）に、墓前祭が執り行われています。

「関城・大宝城の戦いで亡くなった人や伊佐城の人たちに哀感をそそられました。歴史のロマンを感じますね」と渡邊千代子さん（黒子）



船玉古墳



▲船玉古墳前で（右奥は船玉神社）

旧関城町の船玉にある船玉古墳（県指定文化財・史跡）。一辺が35m、高さが4mの方墳で、墳丘上には船玉神社が鎮座しています。石室内部に武器を中心とした壁画が描かれた、貴重な古墳です。

板碑



旧関城町の辻に残る板碑（県指定文化財・考古資料）。高さ96cm、最大幅29・8cmで、弘安元年（1278）の銘が刻まれています。



▲関城跡にある関宗祐の墓

神皇正統記

後醍醐天皇を支え各地を転戦した公卿・北畠親房（1293～1354）は、関城・大宝城での合戦の最中、東国の武士を結集する目的で、『神皇正統記』を記しています。これは、神代から後村上天皇までの事績をあらわし、南朝の正当性を強く訴えるもので、暦応2年（延元4年・1339年）に小田城で執筆し、康永2年（興国4年・1343）に関城で修正したといわれています。同書は、後世の日本に大きな影響を与えたことで有名な歴史書です。

筑西の歴史を訪ねて

特集
国・県指定文化財を中心に



久下田城跡
久下田城跡（県指定文化財・史跡）。栃木県二宮町に接する樋口に築かれた、下館城の支城。天文14年（1545）、下館城主であった水谷政村（蟠龍斎）が、宇都宮氏の来襲に備えて築城したと伝えられています。現

大袖鎧
大袖鎧（県指定文化財・工芸品）。江戸初期の作。享保17年（1732）から幕末まで下館藩を治めた石川氏に伝わった鎧で、石川氏の初代下館藩主である総茂が、伊勢国亀山（三重県亀山市）の名家から分家した時以来のものと思われる。

久下田城跡

旧協和町下星谷（個人蔵）に伝来する木造阿彌陀如来坐像（県指定文化財・彫刻）。高さ70・3cm、ヒノキの寄木造（仏像などの頭部と胴体を別々に作り、つなぎあわせる技法）で、鎌倉時代中期の作です。



木造阿彌陀如来坐像

在は、二の丸跡が公園となっております。



来迎の弥陀

旧下館市森添島の観音院に伝来する来迎の弥陀（県指定文化財・絵画）。絹本着色の弥陀像で縦67・5cm、横32cm。平安時代の天台宗の高僧・恵心僧都の作といわれています。



上羽黒神社

旧下館市の岡芹にある上羽黒神社は、大町の羽黒神社と同じく、水谷勝氏が建立したものとされています。



▲上羽黒神社拝殿（左前）と本殿（右奥）

現在の本殿及び拝殿は、江戸時代初期に建立されたものと考えられ、県指定文化財・建造物になっています。また、水谷家の

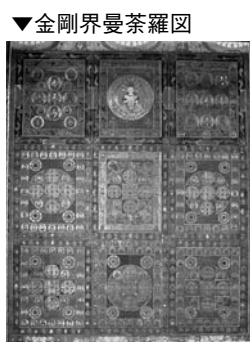
の家老・鶴見内蔵助忠俊が大町の羽黒神社に奉納したものと同様の、縦98cm、横130cmの絵馬（県指定文化財・絵画）が、上羽黒神社にも残されています。



絹本着色両界曼荼羅図



▲胎藏界曼荼羅図



▼金剛界曼荼羅図

絹本着色両界曼荼羅図（県指定文化財・絵画）。旧協和町桑山の神宮寺に残る曼荼羅図（一定

板谷波山生家

板谷波山生家（県指定文化財・史跡）。真壁郡下館町に生まれ、陶芸家として初の文化勲章を受章した板谷波山（筑西市名誉市民・明治5年〜昭和38年）の生家。田町の板谷波山記念館に保存され、波山が田端で実際に使っていた窯などとともに、一般公開されています。



今回の特集で紹介した文化財の中には、一般には公開されていないものや、所有者や管理者などによる事前の見学許可が必要なものが含まれています。